

『日曜日が待ちどおしい』

著：坂井朱生

ill：冬乃郁也

自宅マンションのエントランスに着くと、千加良は葛西の腕に自分の腕を絡めた。千加良は手ぶらで、葛西は着替えを詰めた小ぶりのナイトバッグを持っている。一度、服のまま抱きあっていて、着ていた服をひどく皺にってしまったことがあった。それ以来、彼は会うたび、鞆の中へバッグを用意しているらしい。

じゃれつく子どものようにぴったりと彼にくっついたままエレベーターに乗り共用廊下を歩き、ドアの鍵を開ける。

さすがに他人がいるところではやらないが、葛西はこんなことにも鷹揚だ。

(気にしないのかな)

葛西といると、自分がやけに子どもじみた甘ったれに思えてしまう。遊び相手なら、もっと世慣れていたほうがいいんじゃないかと考えもするが、彼は千加良がそうしてしがみついたり、べたべたしたがるのを咎(とが)めない。

(ガキっぽいとかって、嫌がりそうなのに)

制服がどうか言っていたがあれは冗談として、いかにも遊びなれたふうの葛西が、会うにつれ甘えたがる千加良をよく平気で相手していると思う。

そういえば、子どもがいるって言ってたっけ。

たしか別れた奥さんの連れ子だったとかなんとか、滝守から聞いた。

「ひょっとして、葛西さんて子どもの扱いに慣れてる？」

「あ？ なんだいきなり」

「なんとなく」

子ども扱いされてるのかなと考えると、ちょっとばかり嬉しくない。

どうなんだよ。唇を尖らせて訊くと、葛西はちょっと考えて、それから口を開いた。

「子どもねえ。そりゃま、病院に子どもの患者さんも来るけどな。わりと大変よ？」

葛西の言葉はまるで肩すかしだった。痛くないよとごまかして治療したはいいが、終わったあと、「すげえ痛かった」と言って蹴飛ばされたこともある。葛西は思いだしたのか、くすくすと笑いながら言った。

「治療がすめば痛くなくなるし、虫歯を放っておけばもっと痛い目に遭うって、小さい子にはわからないだろ。言ってきかせられるわけじゃないからな。なんとか宥めすかしておとなしくなってもらうしかなくてな」

彼はそこでふつと言葉を切り、にやりと笑った。

「ちなみに千加良をガキだと思ったことはないの、そういう意味なら気にしないように。家族だの患者さんと千加良とじゃ、ぜんぜん違うだろ」

葛西は悪戯めかして言って、千加良の顎を指先で擦ってくる。

すっかり見透かされている。猛烈に恥ずかしくなって、ぷいと乱暴に顔を背けた。

「俺がべったりくっついて、暑苦しくない？」

「ちっとも」

今日は車で動いていたので、ほとんど濡れていない。部屋に入るとリビングに葛西

を通し、千加良は自分用のコーラと、葛西のビールとを冷蔵庫から出した。

葛西の好きな銘柄の缶ビールは、いつも冷蔵庫に入れてある。

「どうも」

缶を受けとった葛西が、とんとんと彼の横を叩く。横に座ると、彼は千加良の髪を撫でた。柔らかく触れてくる指が心地よくて、千加良はふうっと目を瞑(つむ)る。

「そうだ、千加良。忘れるところだった。ちょっと鞆とって」

「ん？ いいよ」

脇に置いた葛西のバッグを引っぱって渡すと、彼は中から包みを取り出した。

「なに？」

はいよと渡され、千加良はきょとんと目を瞬かせた。

「このまえ、興味ありそうに見てただろ。開けてみな。たぶん、サイズはあってる」

薄い包みを剥(は)がすと、でてきたのはシンプルな濃いブルーのシャツだ。

(あっ、これ——)

数日まえ、葛西と出かけたときに通りがかった、閉店したデパートのショーウィンドウに飾られていたものだ。

ああいうの欲しいなあと思って眺めていただけで、口にだしていたわけじゃない。今度来たときに買おうか、ぼんやり考えていたのに、家に戻ったらもう忘れていた。

「わざわざ？ 買ったの？」

「俺も欲しい服あったから、ついで」

欲しかったシャツが手に入ったことより、些細な動作まで気にしてくれていた彼の気持ちになにより嬉しくて、千加良はシャツを握ったまま、しばらくなにも言えなかった。

ぎゅうっと胸が痛くなる。

「俺、そんなに物欲しげに見えた？」

溺れていくのが悔しくて、ついそんな憎まれ口をきいた。

「莫迦。俺が着せたいと思ったの。そんだけ。千加良といるとホテル代かからないしなあ」

茶化して言ったのは、千加良のためだ。それくらいはわかる。

(こんなだから、夢中になっちゃうんだ)

広げた雑誌を見ながら、行ってみたいねと話した店も、流れたTVのCMで面白そうだと呟(つぶや)いた映画にも、葛西が連れていってくれた。

この調子で手放して甘やかされたら、どんどん駄目になってしまいそうだ。

気軽な遊び相手だと言われてはじめてつきあいなのに、千加良はすっかり葛西に夢中だった。

(他の恋人も、こんなふうにしたの？)

真剣につきあっているわけじゃない千加良にまで甘いのだから、葛西に好かれた他の人たちは、いったいどれほど大切にされていたのだろうか。

あまりしつこくしたら、葛西に嫌われてしまいそうだ。本気じゃないのにと呆れられたらもう、別れなくちゃなくなる。

感情をセーブするのは得意じゃなくて、できないならせめて会う機会を減らしたほうがいいかもしれないと思うのに、葛西が「次はいつにしようか？」と聞いてくれるとつい、会いたい気持ちが先にたって一生懸命に空いている日を探してしまっていた。

(結婚してた人なのになあ)

滝守は、葛西が根っからのゲイだと言っていた。けれど、葛西の口からハッキリ断言されたわけじゃない。

遊び相手なら面倒がなくていいと、両刀かもしれない葛西とのつきあいを承諾したのに、今となっては、その事実がとても重い。

男にも女にも、葛西に近づく人全員に妬いてしまいそうだ。あんまり煩く言うのは嫌なのに、あれこれと詮索してしまいそうで怖い。

今がよければそれでいい。そのつもりでつきあいはじめた。ならば、とことんその気持ちのまま、他のことなんて考えないほうがいい。

「シャツ、さ。今度会うときに着ていくね？」

千加良はもらった服を胸にあてて、ふわんと笑ってみせた。

「今着てくれてもいいけどな」

「今？」

葛西は頷いて、悪戯っぽく目をきらめかせた。

「そう、今。つか、ちょっとあとか。これから俺が脱がすから、そのあとでね」

彼の手が、首筋をすうっと撫でていく。ぞくと背筋が慄いた。

「だったら、早く脱がせて」

抱きあってしまえば、他のことなどなにも考えられなくなる。没頭してしまいたくて、千加良は葛西の胸元へと自分の身体を投げだす。

顔を肩にすり寄せ、大きく息を吸う。消毒薬の匂いが嫌だからと、彼がいつもつけているコロンの匂いが鼻腔に広がった。

葛西はくすくすと笑いながら、千加良のTシャツの下へ手をしのびこませてくる。

「キスして？」

ねだると、うんと熱いキスをくれた。

本文 p94～100 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>